

2020年秋・夢洲より

文・写真 加賀 まゆみ(夢洲生きもの調査グループ理事)

雨が降るたびにあちこちに雨水池が出現する夢洲。3区のIR予定地では、コアジサシの営巣がかなわなかった砂利広場に再出現した雨水池の周りを取り囲むように、ミサゴがのんびり休んでいる。その数、日によって40羽を超える。大阪中のミサゴが集合しているのではないかと思うような風景。夢洲を定点観察していると、じつに驚くことが続く。

水面が広がったり狭くなったりしているが、工事は着々と進められているようで、2区万博予定地にはのっぼの機械が林立し、粘土層の水を抜くためのリボン状のプラスチックドレインを地中深く差し込んでいく。今のところ、2区万博予定地の半分は湿地のまま残されている。そこに、秋の渡りが始まったシギ・チドリ類がやってきた。昨年は20種確認しているが、今年もすでに24種確認(11月3日現在)。これからどれだけ増えるだろうか？

カモ類もすでに11種類合計1,000羽以上が渡来してきた。夢洲の水面は去年から激減したが、去年まで3区の池に来ていた5,000羽を超えるホシハジロやハシビロガモは、去年以上の過密状態になるのか、それともどこかほかの場所へ行く

のだろうか。とくに2区の池に多く来ていたツクシガモとのバッティングがとても気がかりだ。

今秋はウラギクの花を見ていない。だが秋の夢洲は花盛りだ。おおむね外来種ではあるが、色とりどりで美しい。昨年はナルトサワギクが南側の土手を真っ黄色に覆っていた。今年は潮をかぶったのか、その土手のナルトサワギクはほとんど枯れてしまった。今の夢洲で黄色といえばセイタカアワダチソウが席卷しているが、道のわきにはエノコログサに交じって、ピンクのかわいい小花がたくさん咲いている。あまり見かけない花なので気にしていたら、「アメリカウンランモドキ」だと教えてもらった。日本には20年ほど前から入ってきた北米原産の花。昨年は気づかなかった。ちょっと季節がずれるだけで、会える花も変わる。気にしていると、白花のアメリカウンランモドキも何株かあった。エノコログサやススキやメルケンカルカヤの穂が輝く。ヨシも穂を出し、上の方に少しの緑を残して、枯れてきている。来春もまた新芽を拝めるのだろうか。

夢洲の未来は不透明だ。このまま、緩やかに自然創生が続くことが許されないだろうか。大阪の将来の不安とシンクロしているようで、心が痛い。



写真-1 アメリカウンランモドキ



写真-2 ススキとセイタカアワダチソウが花盛り



写真-3 この1枚の写真にはミサゴが7羽映っている